

三鷹市美術ギャラリー 収蔵作品展 III

前期：2022年6月4日(土)～7月10日(日)

会場：三鷹市美術ギャラリー

主催：三鷹市美術ギャラリー・(公財)三鷹市スポーツと文化財団

出品リスト

*は森秀貴・京子コレクション

作品番号	作家名	作品名	イメージ寸法 (縦×横)	制作年	技法/材質	エディション	備考
1	大浦信行	鷹の血	446×310mm	1996年	シルクスクリーン/紙	130/150	*
2	岡崎乾二郎	まるで誰かが表から聞いているみたいに小さい声でわたしの耳もとに囁やくの。それを思い出すと不思議なんです。それを思い出すと不思議なんです。耳で聞くと鼻から匂いがする。ゴムの焼けたような、シソの葉っぱのような匂い。彼女の声を思い出すと、またその匂いがします。	2200×1800mm	1994年	アクリル、ピグメント/カンヴァス(麻布)		
3	岡田紅陽	(不明)	454×557mm	制作年不詳	写真(ゼラチン・シルバー・プリント)		
4	岡田紅陽	湖畔の春	454×557mm	1935年撮影	写真(ゼラチン・シルバー・プリント)		
5	小作青史	四つの顔	415×298mm	1966年	エッチング/紙	26/30	
6	小作青史	明暗	181×421mm	1966年	エッチング/紙	19/30	
7	小作青史	黒い馬	371×405mm	1968年	メゾチント/紙	3/30	
8	小作青史	旗のある風景	620×918mm	1973年	リトグラフ/紙	11/30	
9	小野忠重	斜陽	450×315mm	1952年初作 1977年改作	木版/紙	4/20	
10	小野忠重	道	250×450mm	1957年	木版/紙	6/20	
11	小野忠重	指の上の鳥	400×315mm	1960年	木版/紙	11/20	
12	オノサト・トシノブ	(不明)	245×320mm	1960年頃	水彩/紙		
13	郭徳俊	フォードと郭	1500×1050mm	1977年	写真(ゼラチン・シルバー・プリント)		
14	郭徳俊	クリントンIIと郭	1500×1050mm	1997年	写真(ゼラチン・シルバー・プリント)		
15	郭徳俊	ブッシュ2001 IIと郭	1500×1050mm	2005年	写真(ゼラチン・シルバー・プリント)		
16	郭徳俊	フォードと郭	475×338mm	1974年	リトグラフ/紙	91/100	
17	郭徳俊	カーターと郭	540×370mm	1977年	シルクスクリーン/紙	15/30	
18	郭徳俊	レーガンと郭	539×370mm	1981年	シルクスクリーン/紙	6/20	
19	郭徳俊	レーガンIIと郭	535×383mm	1985年	シルクスクリーン/紙	20/20	
20	郭徳俊	ブッシュと郭	545×410mm	1989年	シルクスクリーン/紙	20/30	
21	郭徳俊	クリントンと郭	545×410mm	1993年	シルクスクリーン/紙	4/30	
22	郭徳俊	クリントンIIと郭	515×370mm	1997年	シルクスクリーン/紙	4/30	
23	郭徳俊	ブッシュ2001と郭	537×360mm	2001年	シルクスクリーン/紙	12/20	
24	郭徳俊	ブッシュ2001 IIと郭	525×370mm	2005年	シルクスクリーン/紙	5/30	
25	郭徳俊	オバマと郭	518×367mm	2009年	シルクスクリーン/紙	8/30	
26	郭徳俊	偽善者の微笑	745×591mm	1995年 (オリジナルは1967年)	シルクスクリーン/紙	99/100	
27	郭徳俊	TIME JUNE 25.1979	240×350mm	1979年	リトグラフ/紙	9/100	
28	郭徳俊	EVENT 791 『反転された自画像791』	362×578mm	1979年	シルクスクリーン/紙	4/5	
29	郭徳俊	EVENT 792 『反転された自画像792』	338×572mm	1979年	シルクスクリーン/紙	4/5	
30	郭徳俊	EVENT 793 『反転された自画像793』	394×575mm	1979年	シルクスクリーン/紙	4/5	
31	郭徳俊	WEIGHT-SCALE EVENT 811	700×500mm	1981年	鉛筆、シルクスクリーン/ 方眼紙	8/30	
32	郭徳俊	WEIGHT-SCALE EVENT 812	700×500mm	1981年	鉛筆、シルクスクリーン/ 方眼紙	6/30	
33	郭徳俊	WEIGHT-SCALE EVENT 813	700×500mm	1981年	鉛筆、シルクスクリーン/ 方眼紙	7/30	
34	郭徳俊	EVENT-RELATION 856	700×500mm	1985年	シルクスクリーン/方眼紙	10/10	
35	郭徳俊	EVENT-RELATION 875	665×155mm	1987年	シルクスクリーン/紙	5/10	

作品番号	作家名	作品名	イメージ寸法 (縦×横)	制作年	技法/材質	エディション	備考
36	郭徳俊	メッセージ 665	190×190mm	1989年	シルクスクリーン/紙	65/100	
37	郭徳俊	メッセージ 668	218×320mm	1989年	シルクスクリーン/紙	90/100	
38	郭徳俊	メッセージ 6617	130×130mm	1989年	シルクスクリーン/紙	59/100	
39	郭徳俊	メッセージ 6612	370×522mm	1990年	シルクスクリーン/紙	46/100	
40	郭徳俊	メッセージ 666	220×320mm	1990年	シルクスクリーン/紙	54/100	
41	郭徳俊	メッセージ 669	270×370mm	1990年	シルクスクリーン/紙	39/100	
42	郭徳俊	メッセージ 908	432×361mm	1990年	シルクスクリーン/紙	62/100	
43	郭徳俊	壁画 922	249×347mm	1991年	シルクスクリーン/紙	81/100	
44	郭徳俊	狩のダンス 922	437×501mm	1992年	シルクスクリーン/紙	55/100	
45	郭徳俊	逃げる鳥 923	398×502mm	1992年	シルクスクリーン/紙	57/100	
46	郭徳俊	大きなえもの 925	411×504mm	1992年	シルクスクリーン/紙	90/100	
47	郭徳俊	無意味 933 (ウサギ)	510×440mm	1993年	シルクスクリーン/紙	78/100	
48	郭徳俊	無意味 934 (カメ)	440×510mm	1993年	シルクスクリーン/紙	69/100	
49	郭徳俊	無意味 935 (風船)	440×510mm	1993年	シルクスクリーン/紙	74/100	
50	郭徳俊	無意味 936 (二匹の鳥)	440×510mm	1993年	シルクスクリーン/紙	65/100	
51	郭徳俊	無意味 937 (アドバルーン)	440×510mm	1993年	シルクスクリーン/紙	73/100	
52	郭徳俊	無意味 9912	100×100mm	1999年	シルクスクリーン/紙	29/100	
53	加納光於	植物 No.1	205×106mm	1955年	銅版/紙		なし
54	加納光於	植物 No.2	204×70mm	1955年	銅版/紙		なし
55	加納光於	植物 No.3	120×210mm	1955年	銅版/紙		なし
56	加納光於	植物 No.4	210×142mm	1955年	銅版/紙		なし
57	加納光於	植物 No.5	182×195mm	1955年	銅版/紙		なし
58	加納光於	芽	293×213mm	1956年	銅版/紙		なし
59	加納光於	部屋	168×212mm	1956年	銅版/紙		なし
60	加納光於	紋章のある風景	195×216mm	1957年	銅版/紙		なし
61	加納光於	illumination-1986 PF-1	504×658mm	1986年	リトグラフ/紙		4/50
62	加納光於	illumination-1986 PF-2	504×658mm	1986年	リトグラフ/紙		4/50
63	加納光於	illumination-1986 PF-3	504×658mm	1986年	リトグラフ/紙		4/50
64	加納光於	illumination-1986 PF-4	658×504mm	1986年	リトグラフ/紙		4/50
65	加納光於	illumination-1986 PF-5	658×504mm	1986年	リトグラフ/紙		4/50
66	加納光於	illumination-1986 PF-6	658×504mm	1986年	リトグラフ/紙		4/50
67	加納光於	illumination-1986 PF-7	658×504mm	1986年	リトグラフ/紙		4/50
68	加納光於	illumination-1986 PF-8	658×504mm	1986年	リトグラフ/紙		4/50
69	河口龍夫	肉眼で見た自画像左眼で	380×280mm	1989年	鉛筆/紙		
70	河口龍夫	肉眼で見た自画像右眼で	380×280mm	1989年	鉛筆/紙		
71	絹谷幸二	湖上富嶽	652×530mm	1991年	アフレスコ		
72	金斗鉦	有三青少年文庫	365×515mm	1990年	水彩/紙		
74	金斗鉦	井の頭公園駅の午後	515×730mm	1992年	水彩/紙		
75	金斗鉦	牟礼二丁目交差点付近	515×730mm	1993年	水彩/紙		
78	金斗鉦	深大寺二丁目付近	730×515mm	1994年	水彩/紙		
79	金斗鉦	下連雀三丁目付近	730×515mm	1995年	水彩/紙		
80	金斗鉦	井の頭四丁目「黒門」付近	730×515mm	1996年	水彩/紙		
81	金斗鉦	下連雀六丁目付近	730×515mm	1997年	水彩/紙		
82	金斗鉦	三鷹駅前	515×730mm	1998年	水彩/紙		
83	金斗鉦	三鷹一小前交差点	515×730mm	1999年	水彩/紙		
84	金斗鉦	三鷹台	515×730mm	2000年	水彩/紙		
85	金斗鉦	野崎交差点	515×730mm	2002年	水彩/紙		
87	金斗鉦	基督教大学裏門交差点	515×730mm	2004年	水彩/紙		
88	金斗鉦	三鷹駅陸橋	515×730mm	2005年	水彩/紙		
91	金斗鉦	三鷹駅前バスロータリー	515×731mm	2008年	水彩/紙		
92	草間彌生	かぼちゃ	722×603mm	1992年	シルクスクリーン/紙	87/120	*
93	草間彌生	かぼちゃ (黄)	603×722mm	1992年	シルクスクリーン/紙	85/120	*
94	草間彌生	かぼちゃ (白)	605×724mm	1992年	シルクスクリーン/紙	76/120	*
95	草間彌生	赤かぼちゃ	722×605mm	1992年	シルクスクリーン/紙	78/120	*
96	草間彌生	考えるかぼちゃ	654×534mm	1993年	シルクスクリーン/紙	75/120	*
97	草間彌生	花 AZ	728×605mm	1993年	シルクスクリーン/紙	49/90	*
98	草間彌生	花 BH	728×605mm	1993年	シルクスクリーン/紙	49/90	*

*は森秀貴・京子コレクション

作品番号	作家名	作品名	イメージ寸法 (縦×横)	制作年	技法/材質	エディション	備考
99	草間彌生	花 FW	728×605mm	1993年	シルクスクリーン/紙	49/90	*
100	草間彌生	花 QE	728×605mm	1993年	シルクスクリーン/紙	49/90	*
101	草間彌生	花 PX	728×605mm	1993年	シルクスクリーン/紙	50/90	*
102	草間彌生	花 XL	605×728mm	1993年	シルクスクリーン/紙	49/90	*
103	黒崎彰	浄夜	730×500mm	1968年	木版/紙	5/20	
104	黒崎彰	二つの時の間に 1	560×820mm	1984年	木版/紙	4/15	
105	黒崎彰	二つの時の間に 2	560×820mm	1984年	木版/紙	23/50	
106	黒崎俊雄	(無題)	1621×3878mm	1983年	油彩/カンヴァス		
107	ジョン・ケージ	FONTANA MIX #1	500×698mm	1982年	シルクスクリーン/紙	60/97	*
108	ジョン・ケージ	FONTANA MIX #2	500×698mm	1982年	シルクスクリーン/紙	48/97	*
109	ジョン・ケージ	FONTANA MIX #3	500×698mm	1982年	シルクスクリーン/紙	54/97	*
110	小島廣志	レッグウォーマー	h1530mm	1981年	ブロンズ		ロビー展示
111	駒井哲郎	三匹の小魚	152×235mm	1958年	銅版/紙	E.A.	
112	駒井哲郎	鳥と果実	305×415mm	1959年	銅版/紙	E.A.	
113	坂口登	NATURE AND ESSENCE OF MIND	456×910mm	1992年	シルクスクリーン/紙	56/88	*
114	坂口登	SNAPSHOT AND TIME AFTER	456×910mm	1992年	シルクスクリーン/紙	1/88	*
143	清水晃	漆黒から	1760×310× 450mm	1984年	木、竹ひご、金属片、黒ラッカー他		
144	清水晃	漆黒から	1200×260× 280mm	1984年	木、竹ひご、金属片、黒ラッカー他		
145	清水晃	漆黒から	840×600mm	1990年	鉛筆、コンテ/トレーシングペーパー		
146	清水晃	漆黒から	840×600mm	1990年	鉛筆、コンテ/トレーシングペーパー		
147	清水晃	漆黒から	840×600mm	1990年	鉛筆、コンテ/トレーシングペーパー		
148	清水晃	漆黒から	600×840mm	1990年	鉛筆、コンテ/トレーシングペーパー		
149	清水晃	漆黒から	840×600mm	1990年	鉛筆、コンテ/トレーシングペーパー		
150	清水晃	漆黒から	840×600mm	1990年	鉛筆、コンテ/トレーシングペーパー		
151	菅井汲	青のマッス	650×500mm	1963年	リトグラフ/紙	44/100	
152	スズキコージジ		820×1125mm	1994年	アクリル/紙		
153	清宮質文	林の中の家	140×113mm	1963年	木版/紙	1/50	
154	清宮質文	虜囚の窓	121×172mm	1971年	油彩/ガラス		
155	清宮質文	夏の夜	175×155mm	1979年	木版/紙	5/50	
156	清宮質文	われむかしの日にしえの年を おもえり	152×130mm	1982年	木版/紙	54/85	
157	清宮質文	黒夜の鳥	140×175mm	1982年	木版/紙	64/70	
158	清宮質文	晩夏	68×70mm	1985年	木版/紙	9/35	
159	清宮質文	秋の午後	110×235mm	1985年	木版/紙	E.A.	
160	清宮質文	月と運河	165×164mm	1988年	木版/紙	29/35	
161	高島野十郎	ひまわり	227×156mm	1912-26年	油彩/板		
162	高島野十郎	けし	531×410mm	1925年	油彩/カンヴァス		
163	高島野十郎	霧と煙	328×458mm	1930-33年	油彩/カンヴァス		
164	高島野十郎	早春	315×408mm	1950年	油彩/板		
165	高島野十郎	りんご	315×409mm	1951年	油彩/板		
166	高島野十郎	太陽	379×455mm	1962年	油彩/カンヴァス		
167	高島野十郎	蠟燭	226×155mm	制作年不詳	油彩/カンヴァス		
168	高松明日香	地中海地方の天気予報 (午後のレディ)	(9点組)	2017年			
168-1		宙	333×333mm	2011年	アクリル/カンヴァス		
168-2		自由な魂	410×318mm	2015年	アクリル/カンヴァス		
168-3		レモンの風景	380×455mm	2016年	アクリル/木製パネル		
168-4		貝拾い	455×380mm	2015年	アクリル/カンヴァス		
168-5		手紙・グラス	242×333mm	2014年	アクリル/カンヴァス		
168-6		ミルク	333×455mm	2014年	アクリル/カンヴァス		
168-7		最後のダンス	333×242mm	2016年	アクリル/カンヴァス		
168-8		バリア内	380×455mm	2016年	アクリル/カンヴァス		
168-9		暑い日	410×318mm	2016年	アクリル/木製パネル		

※No.73,76,77,86,89,90は欠番 ※No.115-142は後期 (2022年7月16日-8月21日) 展示

作家解説

大浦信行 OURA Nobuyuki

1949（昭和24）年-

19歳から画家を志し絵画制作を始め、24歳の時には映画制作を開始する。70年代半ばに渡米、7年間荒川修作の助手を務める。帰国後1986年、版画作品が富山県立近代美術館に展示されると昭和天皇の写真の使用法を巡って批判が起こり、美術館による作品の売却、掲載図録の焼却という事態を招く。作家たちは告訴するも2000年に敗訴。2019年「あいちトリエンナーレ2019」の企画展では、大浦の作品を含む出品作品は物議をかもし、企画展が一時中止となる事態が生じる。これらの出来事は、表現の自由をめぐる社会的な問題へと発展する。

岡崎乾二郎 OKAZAKI Kenjiro

1955（昭和30）年-

彫刻、絵画、映像、建築、舞台美術のほか様々なジャンルで、国内外において活動を展開している。1981年村松画廊にて初個展「たてもののもち building through construction」を開催。1993年から14年にわたる総合地域づくりプロジェクト〈灰塚アースワークプロジェクト〉の企画制作、「第8回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展」の日本館ディレクターなど活動は多岐にわたる。著書である『抽象の力 近代芸術の解析』（亜紀書房）は平成30年度（第69回）芸術選奨文部科学大臣賞（評論等部門）を受賞。武蔵野美術大学造形学部客員教授。

岡田紅陽 OKADA Koyo

1895（明治28）-1972（昭和47）年 本名：岡田賢治郎

学生時代より写真に興味を持ち始め、懸賞などで入選も果たす。1916年に忍野村（おしのむら）（山梨県南都留郡）から撮影する富士山の姿に心奪われ、生涯にわたって富士山の撮影に取り組む。戦争によって撮影は一時中断を迫られるものの終戦後、富士山の撮影を再開し国際的にも「富士の写真家」として知られていくようになる。1966年勲三等瑞宝章受章。富士山を題材にした写真集や関連書籍を多数出版する。作品は千円紙幣E号券裏面の《湖畔の春》をはじめとして、切手などにも多く採用される。享年77歳。

小作青史 OZAKU Seishi

1936（昭和11）年-

中学高校の時から画家になることを志し、油絵を描き始める。オノレ・ドーミエを知ったことをきっかけに石版画に関心を持つ。プレス機がなくても自由に版画を制作できる木版リトグラフや、日本の版画の普及に大きく貢献したバレンの存在に着目し新たなバレンとして楊枝バレンを開発するなどの取り組みによって、学校教育をはじめとした版画の普及に努める。多摩美術大学名誉教授。

小野忠重 ONO Tadashige

1909（明治42）-1990（平成2）年

早稲田実業学校在学中の1924年蒼原会に所属し、他に岡田三郎助の本郷洋画研究所などにも通い絵画を学ぶ。永瀬義郎の著作によって版画の魅力を知り、版画制作を開始する。翌年の「白日会第2回展」にて初入選。卒業後は家業の酒屋を手伝いながら舞台美術の制作に携わる。1929年「第2回プロレタリア美術大展示会」に出品。1932年版画の大衆化を理念とした新版画集団を結成する。さらに1936年に造型版画協会を設立。出版事業、展覧会企画や版画史研究にも取り組み、版画の普及に努める。享年81歳。

オノサト・トシノブ ONOSATO Toshinobu

1912（明治45）-1986（昭和61）年 本名：小野里利信

1931年津田青楓洋画塾に入り、1935年「第22回二科展」に初入選する。同年津田青楓洋画塾出身の野原隆平らとともに黒色洋画展を結成、1937年同会を脱退し自由美術家協会に参加する。1942年召集され、戦後シベリアに抑留される。1948年帰国。1955年頃から円と直線を用いた画面分割の作品を制作する。海外の展覧会への出品や個展の開催など国際的に活動する。享年74歳。

郭徳俊 Kwak Duck-Jun

1937（昭和12）年-

1955年京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸課程日本画科卒業。その後、ロウケツ染めの仕事に従事するものの、20代前半に大病を患い3年間の療養生活を送る。闘病の経験と在日韓国人2世という自らの出自に向き合う中で芸術家としての生き方を定める。60年代には絵画、70年代はビデオ、イベント、版画、写真など多様な作風を展開する。1972年「第8回東京国際版画ビエンナーレ」にて文部大臣賞受賞。1974年から雑誌『TIME』の表紙に掲載されたアメリカ大統領の写真と自らの顔を繋ぎ合わせた〈大統領〉シリーズの制作を開始する。

加納光於 KANO Mitsuo

1933（昭和8）年-

病弱で中学校を中退し自宅で療養生活を送る。19歳の時に古書店で見つけた今純三著『版画の新技法』（ジープ社）に触発され、自らプレス機を設計し、独学で銅版画を始める。1955年初の銅版画集《植物》（私家版・8部限定）を刊行。1956年瀧口修造の推薦によりタケミヤ画廊で初の個展を開催する。当初は銅版画でモノクロ世界を表現していたが、60年代半ばから亜鉛板を用いた金属版画へと移行し、作品に色彩が現れる。1959年「第3回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ」にてリュブリアナ近代美術館賞を受賞。その他国内外における受賞多数。

河口龍夫 KAWAGUCHI Tatsuo

1940（昭和15）年-

1962年に多摩美術大学絵画科油画専攻を卒業。1965年神戸にて9人の若手美術家によるグループ展を結成、ダイワ画廊でグループ展「非人称展」などを開催し、その実験的な試みにより注目を集める。80年代初頭から多くの作品タイトルに「関係」という言葉を用いるようになる。また1975年以来、闇を光の中で視覚的にとらえることを目的として、鉄製の容器に闇を封印した〈DARK BOX〉を制作する。「見えること」と「見えないこと」の間に存在する関係性について着目し、作品の制作に取り組んでいる。

絹谷幸二 KINUTANI Koji

1943（昭和18）年-

1966年東京藝術大学美術学部油画専攻卒業。同年（第34回）及び翌年（第35回）「独立展」独立賞受賞、その後も同展へ毎回出品。1968年同大学院美術研究科修了。1971年イタリアのヴェネチア美術アカデミーに入学し、アフレスコ（壁画技法）について研鑽を積む。1973年帰国。1974年安井賞を受賞。1977-78年文化庁派遣芸術家在外研修員として渡欧。1979年十果会の結成に参加。70年代後半以降ホテル、病院、劇場などで多くの壁画制作を手がける。色彩豊かな画面とエネルギーに満ちた独自の画風を確立し、精力的な活動を続けている。

金斗鉉 KIM Togen

1953（昭和28）年-

大韓民国ソウル市生まれ。1971年来日。広告代理店にグラフィックデザイナーとして勤務。退職後、フリーのイラストレーターとして広告や装丁など幅広い分野で活動。1990年から2008年の間、三鷹市の広報誌『グラフみたか』の表紙絵を手がける。またライフワークとして「絵が描けない人のためのワークショップ」「幼稚園の先生とお母さんのための絵の教室」を開き、2008年からは海外の子どもたちに向けての教育にも力を注いでいる。全国での個展の開催のほか、数多くの絵本や書籍のイラストを担当。

草間彌生 KUSAMA Yayoi

1929（昭和4）年-

小学校入学の頃より幻聴や幻視に悩まされるようになり、その体験から生まれる恐怖や不安を絵画に表現し始める。1945年16歳で「全信州美術展覧会」に入選する。日本画を学ぶために1948年京都市立美術高等学校の最終課程へ編入し、翌年卒業。日本画の手法に囚われない独自の表現方法へと移行する。1957年渡米。絵画、彫刻、インスタレーション、ハプニング、さらに自作自演の映画を制作。各地で個展を開催し、1973年に帰国。小説や詩のほか、野外彫刻やドキュメンタリー映像にも取り組み、現在も世界中で活動している。

黒崎彰 KUROSAKI Akira

1937（昭和12） - 2019（令和元）年

学生時代から浮世絵の収集をはじめ。幕末期の錦絵の強烈な色彩に影響を受け1965年ごろより京都の摺師のもとを訪ね歩き、職人たちから彫りや摺りの技術を学び、木版画制作を始める。1970年から闇をテーマとして、赤と黒の対比が特徴的な作品を制作するようになる。1973-74年文化庁派遣芸術家在外研修員としてアメリカやドイツへ渡る。伝統的な木版画技術を駆使しながらも、新しい表現の開拓に挑み続ける。版画史、版画技法の研究者としても知られる。京都精華大学名誉教授。享年82歳。

黒崎俊雄 KUROSAKI Toshio

1946（昭和21） - 2021（令和3）年

1971年に東京藝術大学美術学部油画専攻を卒業、大橋賞受賞。1973年同大学院美術研究科油画専攻修了。1977-79年イタリア政府給費留学生としてブレラ美術アカデミーで学ぶ。帰国後は東京藝術大学美術学部非常勤講師を務めながら、みゆき画廊、Graphica Club Moderna（ミラノ）、お茶の水画廊、ギャラリー川船、ギャラリーアピアントなどで個展多数。初期はモノクロを中心とした落ち着いた作品を制作していたが、晩年は動物や植物を描き色彩豊かな親しみやすい作風へと変化していく。享年74歳。

ジョン・ケージ John Milton Cage Jr.

1912（大正元） - 1992（平成4）年

アメリカ合衆国カリフォルニア州生まれ。ヘンリー・カウエル、アルノルト・シェーンベルクらに師事する。1940年グランドピアノの弦にゴムやボルト等を挟み込んで音色を変えるプリペアド・ピアノを考案。ダンサーでコレオグラファーのマーサ・カンニングや思想家のバックミンスター・フラーらと交流を持ち、ブラック・マウンテン・カレッジで教鞭をとる。禅や易などの東洋思想にも親しむ。1952年には偶然性の音楽を追求した全楽章休止の《4分33秒》を発表、初演。音楽家以外にも後進の多くの芸術家に影響を与えた。享年79歳。

小島廣志 KOBATAKE Hiroshi

1935（昭和10） - 1996（平成8）年

幼いころから彫刻家・後藤良に指導を受け、鑿（のみ）の使い方を学ぶ。1955年東京藝術大学美術学部彫刻専攻へ入学。1958年初個展を村松画廊にて開催。1959年「第44回二科展」に初めて出品し、特選を受賞する。当初の抽象的な表現から変化し、後に人体をモチーフとした作品を多く制作するようになる。60年代後半から教壇に立ち、後進の育成にも力を注ぐ。1977年第6回平櫛田中賞受賞。1980年KOBATAKE彫刻工房を開校。版画制作も開始する。享年61歳。

駒井哲郎 KOMAI Tetsuro

1920（大正9）-1976（昭和51）年

学生時代に雑誌『エッチング』で銅版画の存在を知り、その魅力に取りつかれる。1938年東京美術学校油画科予科に入学。1944年、応召。1951年「第1回サンパウロ・ピエンナーレ」で在聖日本人賞を受賞する。日本人作家として戦後初の国際展での受賞となる。翌年、瀧口修造の誘いにより実験工房へ参加。1954年4月よりフランス留学、パリに長谷川潔を訪ねる。翌年12月帰国。1958年詩人・大岡信との合作を発表。総合芸術の憧れの実現の場として、晩年まで文学者や詩人との共同制作は重要な制作の場となった。享年56歳。

坂口登 SAKAGUCHI Susumu

1944（昭和19）年-

1956年12歳でアメリカ合衆国に移住。14歳から本格的な美術教育を受け始める。1972年カリフォルニア芸術大学大学院修士課程修了。ナム・ジュン・バイクラに師事。1977年ニューヨークの個展をイサム・ノグチに認められ、1988年ノグチが没するまでアシスタントを務める。1981年の原美術館での作品発表を契機に日本での活動を開始する。アメリカと日本という異なるバックグラウンドによって培われたアイデンティティをアーティストの目で見つめ、独自の方法によって分割されたカンヴァスの中で統合していくことを試みる。

清水晃 SHIMIZU Akira

1936（昭和11）年-

金沢美術工芸大学洋画課卒業後は横浜の親戚宅に身を寄せ、メッキ工場で働く。1963年「第7回シェル美術賞展」に《色盲検査表No.4》と《色盲検査表No.9》を出品し、一席を受賞する。70年代後半から、竹ひごや漂流物で構成された夥しい数のオブジェと素描から成る〈漆黒から〉シリーズを制作。80年代は地域開発計画として〈天草プロジェクト〉〈新宿プロジェクト〉を構想し、90年代半ばからは色彩豊かなレリーフや絵画の制作を開始する。そのほか、舞踏公演の衣装やポスターの制作に携わるなど幅広い活動を展開する。

菅井汲 SUGAI Kumi

1919（大正8）-1996（平成8）年 本名：菅井貞三

幼少期から病弱だったため小学校卒業後は自宅療養が続いていたが、1933年から大阪美術学校に通う。1937年から阪神急行電鉄株式会社に就職し、グラフィックデザイナーとして勤務しながら、日本画を中村貞以に師事する。1952年にフランスに渡り、アカデミー・ドゥ・ラ・グラン・ショミエールに通う。翌年ホワイエ・デ・ザルティストにて今井俊満、田淵安一、ヴァロールズと「4人展」を開催。その後も国内外の展覧会へ参加し、数多くの賞を受賞する。欧州を中心として国際的な活動を展開する。享年77歳。

スズキコージ SUZUKI Koji

1948（昭和23）年- 本名：鈴木康司

幼いころから美術に関心を持ち、隣人の家で見たゴッホの画集や、母親と共に訪れた山下清の展覧会に感銘を受ける。中学生のころから画家になることを夢見ていたが、美大の受験に失敗し飲食店で働きはじめる。叔父に紹介された当時広告代理店にアートディレクターとして勤めていた堀内誠一の目に留まり、作品が雑誌で発表される。1968年新宿歌舞伎町路上にて初個展を開催する。1972年『ゆきむすめ』（初版・世界文化社 現・ビリケン出版）で絵本画家としてデビュー。絵本をはじめ、ポスター、壁画、舞台美術など幅広い領域で活動する。

清宮質文 SEIMIYA Naobumi

1917（大正6）-1991（平成3）年

画家・版画家・清宮彬の長男として生まれる。麻布中学卒業後、同舟舎絵画研究所で駒井哲郎と出会う。東京美術学校油画科に入学し、藤島武二や田辺至に師事。卒業後は美術教師となる。1944年に応召。復員後は再び美術教師を務めた後に商業デザイナーとして活動するが、1953年東京美術学校の同級生らと共に鱻（ゲフ）会を結成し、制作に打ち込むようになる。1954年に春陽会の「第31回春陽会展」に初出品を果たし、岡鹿之助の激励を受ける。1958年サエグサ画廊にて初個展開催。それ以降も国内での個展を中心に活動を続ける。享年73歳。

高島野十郎 TAKASHIMA Yajuro

1890（明治23）-1975（昭和50）年 本名：高嶋彌壽

1916年東京帝国大学農学部水産学科を首席卒業後、絵画の制作に専念する。1921年三会堂にて初個展が開催される。1928年渡邊光徳や梶原貫吾らと黒牛会を結成し、1930年まで出品を続ける。その後は美術団体に属さず単独での制作を貫く。1930年から3年間米国経由で欧州に滞在し帰国後に郷里の福岡に戻るが、再び東京・青山へ転居する。1960年千葉県柏市に転居。個展を唯一の発表の場としながら、旅をしつつ風景画、静物画を中心に写実的な作品を描き続ける。享年85歳。

高松明日香 TAKAMATSU Asuka

1984（昭和59）年-

2007年尾道市立大学芸術文化学部美術学科デザインコース卒業。2009年尾道市立大学大学院美術研究科美術専攻修了。同年、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館造形スタジオにて初の個展「トリミング」が開催される。2011-17年に倉敷芸術科学大学の非常勤講師を務める。2013年から約1年メキシコシティにて滞在制作を行う。メキシコの壁画作家であるダビッド・アルファロ・シケイロスの最大の壁画がある劇場ポリフォルム・シケイロスに感銘を受ける。現在も身近な風景や舞台、映画の中のワンシーンを描き続けている。